句動詞における <削除された自明の目的語> の考察

An Analysis of <Deleted Self-Evident Objects> in Phrasal Verbs

— “T's Hypothesis” の検証 —

Verification of “T's Hypothesis”

山田　昇司（朝日大学経営学部）
YAMADA, Syouzi (Business Administration, Asahi University)
寺島　隆吉（岐阜大学教育学部）
TERASIMA, Takayosi (School of Education, Gifu University)

0．はじめに
1．T's Hypothesis（寺島の仮説）とは何か
2．本論の動機と目的
3．句動詞の定義と分析の方法
3．1　句動詞の定義
3．2　句動詞の分析の方法
4．タイプ１の句動詞の分析
4．1　自他両用の動詞（能格動詞）の分析
4．2　自動詞しかないもの（非対格動詞）の分析
4．3　タイプ１の句動詞のまとめ
5．タイプ２の句動詞の分析
5．1　do without の場合
5．2　take after の場合
5．3　他のタイプ２の句動詞への応用
5．4　タイプ２の句動詞のまとめ
6．タイプ３の句動詞の分析
6．1　put up with と put up at の比較分析
6．2　put up with 再考
6．3　その他のタイプ３の句動詞の検討
6．4　さらにいくつかのタイプ３の句動詞の検討
6．5　タイプ３の句動詞のまとめ
6．結論
7．おわりに
NOTES
REFERENCES
DICTIONARIES　&　WEBSITES

序

以下は山田昇司氏の修士論文の一部である。これは丸暗記をしなくても句動詞の意味を捉えることができるようにと提案したT's Hypothesis（寺島の仮説）を幾つかの動詞に絞って考察したものである。この研究は既に発表されている山田昇司・寺島隆吉 (2006)「動詞の意味を学ぶ授業書：get と turn の話」の続編をなすものである。

この論考では従来の論文とは違って修士論文を完成させるために私との間におこなわれた思考過程をなるべくそのまま残すように務めた。そのほうが句動詞の意味を考えるときの思考過程を読者が追体験できるのではないかと考えたからである。と同時にそれは，T's Hypothesis（寺島の仮説）の検証過程を読者が追体験することにもなると考えた。この論文を山田・寺島の共著とした所以である。

残された課題は山田氏が「おわりに」でも述べているように，「想定される目的語（it, oneself など）の使用における一定の規則性」について更に解明すると同時に，この研究成果をもとにした記号研独自の熟語成句事典を完成させることである。[Jan.4, 2006，寺島]

0　はじめに

英語教師は，例えば，put up withという句動詞を教えようとする時，多くの場合それを一括りの熟語として「〜を我慢する」と生徒に提示するのではないだろうか。私もかつてはそのような教師であった。しかし，寺島隆吉氏が提唱する「記号付け」の理論と実践に出会ってから事情は変わった。寺島氏の英文読解のメソッドのひとつに英語と日本語を一対一に対応させる「穴埋め順訳」というものがあるからだ。下に示すように英文の下の記号に日本語で穴埋めをして行く。

(1)　I　(can|　not　| put)　up　[with　his behavior.]

(2)　私　(出来る|　ない　|おく)　上に　[〜に関して　彼の振る舞い]

低学力の生徒用プリントでは単語の意味はヒントとして全て与えられているので穴埋めしていくのは難しくないし，ヒント欄にはさらに「put up with：〜を我慢する」とも書き込まれているので，生徒は自力で英文を訳していくことが出来る。この読解メソッドは学力の低い生徒だけでなく高い生徒も含めて多数の生徒の支持を受け，その実践の様子は寺島隆 (1989)，寺島美 (1987)，野澤 (2003)，山田 (2005)，岩井 (2006) などで知ることが出来る。

ところが今度は，上記(2)における「置く」「上に」「〜に関して」からどうして「〜を我慢する」という意味が生まれてくるかを教師が説明する必要が生まれた。この問題に関しては，寺島 (1990, 2000) がすでにその解決の方向性を示しているが，まだ未解明のまま残されている成句は多い。同書で寺島が記号研独自の熟語成句辞典の必要性を訴えているのはこのような事情による。筆者はこれまで山田 (1999a, 1999b, 1999c, 2000a, 2000b)，山田・寺島隆 (2006) においていくつかの成句分析の試みを行ってきたが，本論はその一連の論考を発展・深化させようとするものである。

1．T's Hypothesis（寺島の仮説）とは何か

寺島 (1990, 2000) が示している解決の方向性は，具体的に言うと，「自動詞を含む句動詞において構成素の原義から意味を取れないものは省略されている自明の目的語，とりわけ it もしくはoneself を補って考える」というものである。 寺島はこれを「T's Hypothesis 寺島の仮説」と呼んでいる。江川 (1991:185) には「自明の目的語が省略されると，他動詞が自動詞化」すると書かれているが，「寺島の仮説」はこれを逆に応用して，自動詞に削除された目的語を補うことで，自動詞を含む句動詞の意味の構造を解明しようとするものである。

例えば，次の二つの英文においては前者 (a) の動詞は他動詞，後者 (b) は自動詞と分類されるが，実際には後者 (b) の動詞にも「自明の目的語」として出発する地点を表す目的語が消えていると考えることが出来る。

(a)　He left Sendai for Kyoto.

(b)　She left for London yesterday .

(b')　She left *Tokyo* for London yesterday.

辞書には「自動詞」として分類されているものであっても，実際のところは「自明の目的語が省略されている他動詞」であることはよく見られる現象である。

次の文例における give も辞書では自動詞として出てくるが，やはり「自明の目的語」が略されている他動詞とみなすことができるであろう。

(c)　She gives freely.

(*c*')　She gives *her money* [to other people] freely.

(d)　Our country has to give to the Third World.

(d')　Our country has to give *our aid* to the Third World.

このように考えてみると，句動詞においても，それを構成する自動詞に「自明の目的語」を補って考えるという寺島の主張の妥当性が納得できるであろう。

句動詞についてはこれまで，その意味は句を構成する動詞と副詞または前置詞の個々の意味からは推測できないと考えられてきた。しかし近年副詞や前置詞の比喩的な意味の拡張に注目してその意味を解明しようとする試みが出てきた。東信行・松本理一郎 (1991) はそのひとつの試みである。簡略化された図によって副詞や前置詞の意味が理解しやすくなっているが，「get up 全体の「起きる」という意味は get の基本的な意味「得る」と up の基本的な意味「上へ」を足しても出てきません。また句動詞の多くが前置詞や副詞を省くと，意味が変わったり，英語として成り立たなくなってしまう」(p.1) と述べていることから分かるように，句動詞をひとまとまりのものとして捉える傾向がある。

しかしこれに対して，田中茂範 (1987, 1989, 1990) は動詞の中核的意味にも注目することで句動詞の意味の成り立ちを説明しようとしている。この中で田中は目的語のない動詞の get, give, take などに再帰代名詞 oneself を補って解している。

一例を挙げると，“You must not give in to threats if you want to put your plan into action.”という例文を，give oneself in と再帰代名詞を補い，「自分自身を give して，脅しのところに入っていく」と説明している。[田中 (1989:91)]

しかし再帰代名詞の補充では十分に説明の仕切れていないと思われる例も見られる。その一例が“Fighting finally broke out between the rival groups.（対抗集団のあいだでついに戦いが起こった。）という文において，「容器に見立てられた戦いが壊れて，そして表に出るようになる」と説明していることである。[田中 (1989:211)]　この句動詞の説明には寺島仮説が提起するように「状況の it」を補って「戦いが it (=平和な状況) を壊して，表に出る」としたほうがより無理のない説明となるだろう。

田中は「状況の it」という発想を全く持っていない訳ではない。田中 (1987:44) では，do が自動詞として使われている“That will do.”や“This room will do for my study.”という英文においては，目的語としてそれぞれ「あること」「書斎としての機能」の意味が読み取れると述べている。また，“do away with”,“do with”,“do without”という熟語についても「DO のコアが，どこかにいってしまう訳ではない」と述べ，DO (X,Y,Z) =「XがYに対して Z をする」のコアが保持されると書いている。

しかし田中は，動詞のコアの意味に着目しながらも，自動詞用法と他動詞用法をそれぞれ別個に扱いながら論を進めている。この点，寺島仮説は自動詞と他動詞を並列的には扱わずに，他動詞を中心

にして，つねに英語の基本構造「名詞＋動詞＋名詞」に立ち戻るような分析を提起している［註１］。そして田中が「自動詞用法において読み取れる目的語」と述べているものには明確に「状況の it」という用語を与えている。[寺島 (2000:198-208)]

まとめるならば，寺島は田中の考え方に賛同しながらも，それをより明確に理論化し，外国語として英語を学ぶ学習者がより理解しやすい形で句動詞の意味解析の方法を提起していると言えるだろう。

2　本論の動機と目的

本論を書こうとした直接の動機は get over + NP（〜を乗り越える）という句動詞の意味をどのようにして説明するかという問題に直面したことであった。

筆者は，山田・寺島 (2006) において get の句動詞の考察を行ったとき，上記の句動詞を「get の後に状況の it を補って，困難を乗り越えて it（＝よりよい状況）を得る」と解したらどうかという指摘をセミナーで受けたのだが，すでにその論文の前半に登場する同じタイプの句動詞 get in (…に乗り込む)，get on（…に乗る）において，「get oneself in / on…」のように再帰代名詞を補い，また別タイプの句動詞である get away, get back においても同じように oneself を補って説明を行っていた。そこでその説明との整合性を保つために，it ではなく再帰代名詞を補って get over を説明することにした。

get [over…] については，「状況の it」と「再帰代名詞」のどちらを目的語の位置に補充してもその意味を復元することが出来るように思われるが，どちらがより適切な手法なのであろうか。そのことを解明するのは一度句動詞全般にわたって検討する必要があるのではないかと考えた。句動詞の意味を構成素から再現しようとする時には，どんな場合にどんな目的語を補って考えると一番分かりやすいのか，想定される目的語（it, oneself など）の使用には一定の規則性が存在するのだろうか。本論の目的はこのような疑問を追求することであった。

3　句動詞の定義と分析の方法

3．1　句動詞の定義

句動詞の数は，例えば Cowie et al. (1975) においては7000個が収録されているが，これらを全て検討することはもちろん出来ない。そこで本論では安藤 (2005: 737-748) に収録されている数十個の句動詞を検討対象とする。同書は句動詞（phrasal verb）を「英語本来の基本動詞に不変化詞を組み合わせて，統語的・意味的に一つのまとまった動詞句として使用するもの」と定義し，以下の８つのタイプに分類している。

タイプ	安藤(2005) の分類基準	例　　文
1	自動詞＋副詞	My car broke down on the way. A war may break out.
2	自動詞＋前置詞句	Don't hesitate to ask for advice. I will call for you by three.
3	自動詞＋副詞＋前置詞句	We have just run out of sugar. I must make up for lost time.
4	他動詞＋副詞	Look up the word in your dictionary. We must carry out this plan by all means.
5	他動詞＋目的語＋副詞	He saw the crisis / it through. The police moved the spectators / them along.

6	他動詞＋名詞句＋前置詞句	The pickpocket robbed her of her purse. The mother made too much of her younger son.
7	自動詞＋前置詞句＋前置詞句	He argued with John about politics. He applied for a job to the firm.
8	他動詞＋名詞句＋副詞＋前置詞句	We let him in on our plans. We brought them around to our point of view.

この分類をQuirk et al. (1985:1161) の「多語動詞タイプ」の 6 分類と比べると，タイプ 7 がQuirk et al. (1985) では 6 分類以外のマイナーな分類 [ibid. 1167-1168] に含められていることや安藤のタイプ 4 とタイプ 5 が Type II PHRASAL VERB として一括りにされているところが異なるが，「句動詞 phrasal verbs」という呼称について言えば， Quirk et al. (1985) でこの呼称を使っているのは，安藤(2005) のタイプ 1，タイプ 4 ・ 5 に分類されているもののみである。（下表網掛け部）

安藤 (2005) による句動詞		Quirk et al. (1985) による多語動詞の分類	
1	自動詞＋副詞	Type I　PHRASAL VERB	crop up　**
2	自動詞＋前置詞句	Type I　PREPOSITIONAL VERB	come across ---
3	自動詞＋副詞＋前置詞句	Type I　PHRASAL-PREPOSITIONAL VERB	come up with ---
4	他動詞＋副詞＋名詞句	Type II　PHRASAL VERB	turn down---
5	他動詞＋名詞句＋副詞	Type II　PHRASAL VERB	turn --- down
6	他動詞＋名詞句＋前置詞句	Type II　PREPOSITIONAL VERB	take --- for～
7	自動詞＋前置詞句＋前置詞句	VERBS GOVERNING TWO PREPOSITIONS	apply for---to---
8	他動詞＋名詞句＋副詞＋前置詞句	Type II　PHRASAL PREPOSITIONAL VERB	put --- up for ---

** 「不意に予期せずに現れる」の意

すなわち，Quirk et al. (1985) は動詞については自動詞か他動詞かを問わず，それに副詞のみがついているものを「句動詞 phrasal verb」と呼んでいることになる。本論では自動詞に「副詞」だけでなく「前置詞」を含んだものも検討の対象とするので，安藤の分類の方を用いることにする。

3．2　句動詞の分析の方法

安藤の分類で筆者が注目したところは，目的語が常に動詞の直後に来るタイプ 5 をタイプ 4 から分離独立させているところである。安藤は同書別項(p.837)で，この動詞を「手段動詞」と呼び，「ネクサス目的語」[Jespersen (1924:114) の用語] を補部に取ってその文はSVO型に属すると説明している。本論ではこの「ネクサス目的語」という概念を，タイプ 5 だけでなく他のタイプの句動詞における「目的語と不変化詞の関係」を考える際にも利用する。

句動詞の意味を「動詞」「副詞」「前置詞」[註　2] の原義に立ち戻って復元しようとする試みは，これまで，田中 (1987, 1989, 1990)，寺島 (1990, 2000)，大西・マクベイ (2005)，酒井 (2005) などにおいて行われてきている。本論では先に述べたように，これらの先行研究の中でも最も合理性があると考えられる T's Hypothesis（寺島の仮説）を適用して自動詞を含むタイプ 1，タイプ 2，タイプ 3 について，「状況の it」や再帰代名詞などを補って検討していく。（タイプ 7 も自動詞を含むが，タイプ 2 の発展形と考え，本論での検討対象からは除外する。）

T's Hypothesis を適用するとは，具体的に言うと次のような思考実験を行うことである。

第１段階としては，削除されている可能性の最も高い「状況の it」や再帰代名詞を動詞の後に補ってみて前後関係から文意を考えてみる。タイプ２やタイプ３の場合は，第２段階として，前置詞の直後にあるNP と it / oneself を入れ替えてみることもある。

タイプ１の場合

My car broke down on the way.

↓

<1st Step>

My car broke it down on the way.　・・・「状況の it」を補う

My car broke itself down on the way.　・・再帰代名詞を補う

タイプ２の場合

I will call for you by three.

↓

<1st Step>

I will call it for you by three.　・・・・・「状況の it」を補う

I will call myself for you by three.　・・・再帰代名詞を補う

↓

<2nd Step>

I will call you for it by three.　・・・・・you を移動し，「状況の it」を補う

I will call you for myself by three.　・・・you を移動し，再帰代名詞を補う

タイプ３の場合

I must make up for lost time.

↓

<1st Step>

I must make it up for lost time. ・・「状況の it」を補う

I must make myself up for lost time. ・・・再帰代名詞を補う

↓

<2nd Step>

I must make lost time up for it. ・・・lost time を移動し，「状況の it」を補う

I must make lost time up for myself .・・・lost time を移動し，再帰代名詞を補う

次節からはタイプ１，タイプ２，タイプ３の順に検討していく。句動詞によっては，思考実験がこの順序通りには行われていなかったり，時には it や oneself 以外の自明の目的語を想定したこともあるが，大きな原則としては常に上記の段階を踏まえて検討を進めていった。

４．タイプ１の句動詞の分析

前述の安藤(2005)は，タイプ１「自動詞＋副詞」に属する句動詞として以下のようなものを挙げている。

break down（故障する），break out（戦争・火事などが急に起こる）。break up（解散する），come about（事故などが起こる），come off（ボタンなどが取れる），come out（明るみに出る），drop in（立ち寄る），get away（逃げる），get on (暮らしていく)，get up（起きる），give in（降参する），get on（行われる），look out（気をつける），show up（姿を見せる），

sit / stay up (寝ずに起きている), take off（飛行機が離陸する), turn out（結局…になる), turn over（ひっくり返る）

影山 (1996:140) によれば，英語の動詞は自動詞と他動詞という観点から,「他動詞しかないもの」「自動詞しかないもの（非対格動詞)」「自他両用の動詞（能格動詞)」の 3 つのグループに大別できると述べているが，それに従えば上記の句動詞群は構成素の自動詞の性格によって以下のように 2 つに分けることが出来る。

1．非対格動詞（純粋な自動詞）を含むもの

come about（事故などが起こる), come off（ボタンなどが取れる), come out（明るみに出る）

2．能格動詞（自他両用動詞）を含むもの

break down（故障する), break out（戦争・火事などが急に起こる)。break up（解散する), drop in（立ち寄る), get away（逃げる), get on (暮らしていく), get up（起きる), give in（降参する), go on（行われる), look out（気をつける), show up（姿を見せる), sit / stay up (寝ずに起きている), take off（飛行機が離陸する), turn out（結局…になる), turn over（ひっくり返る）

4．1　自他両用の動詞（能格動詞）の分析

4．1．1　再帰代名詞を補う分析

影山は同書で，非対格動詞は外的な使役作用を全く含んでいないが，能格動詞はたとえ自動詞であっても概念構造において使役構造を持っているとして，その根拠として能格動詞には再帰代名詞が現れることがあると指摘している。

1. This door opens itself.
2. The fire rapidly spread itself through the building.
3. *A traffic accident happened itself at the corner.
4. *Bright ideas emerged themselves.

句動詞の能格動詞に再帰代名詞を補う手法は，田中 (1990) も take off（離陸する), take to（…が習慣になる）において採用し，以下のような分析を行っている。

上では，他動詞用法を中心にみてきたが，take には The plane took off.（飛行機が離陸する）とか He took to drinking.（酒びたりになる）のような自動詞用法があり，一見，＜取り入れ＞の行為とは，全く無関係であるといった印象も与えるが，これらの場合もここで提案しているコアを使って説明することが可能のようである。

a) The plane took ϕ off (the ground)

[i.e.　The plane [X] took (itself [Y]) off]　→　X = Y

b) He took ϕ to drinking.

[i.e.　He [X] took (himself [Y]) to drinking.]　→　X = Y

ここで示すように，＜飛行機（X）が自分自身（Y）をtakeし，滑走路から離れる＞と＜彼（X）が自分自身（Y）をtakeし，酒を飲んでいる状態 (drinking) のところに持っていく＞と解釈できるからである。

自他両用の動詞（能格動詞）に再帰代名詞を補って考えるということは，例えば，breakを「〜が壊れる」ではなくて「〜がそれ自身を壊す」，dropを「〜が落ちる」ではなくて「〜がそれ自身を落とす」といったふうに解することである。

４．１．２　break down, drop in などの分析

以下，安藤 (2005) の例文を用いてその作業を行ってみる。上段がその例文で，下段が筆者による解析である。

a.　My car broke down on the way.
　　車が途中で故障した。
　　My car broke [itself] down on the way.
　　車がそれ自身を壊して，downの状態にした，途中で

b.　He dropped in to see us last night.
　　彼は昨夜私たちのところに立ち寄った。
　　He dropped [himself] in to see us last night.
　　彼は彼自身を落として，in の状態にした，私たちに会うために，昨夜　[註３]

c.　The boxer gave in in the third round.
　　ボクサーは第３ラウンドで降参した。
　　The boxer gave [himself] in in the third round.
　　ボクサーは自分自身を与えて，inの状態にした，第３ラウンドで

d.　How are you getting on?
　　いかがお過ごしですか。
　　How are you getting [yourself] on?
　　どのようにあなたは自分自身を手に入れていますか，onの状態になるように

e.　He didn't show up at the office next day.
　　彼は翌日事務所に姿を見せなかった。
　　He didn't　show himself up at the office next day.
　　彼は自分自身の姿を現さなかった，up の状態になるように，事務所に，翌日

こうして自他両用の能格動詞に再帰代名詞を補って訳してみると，「行為者が自分自身をVさせて副詞の状態の結果が生みだす」という使役的な文意が浮かび上がってくる。

また，以下に示すように，副詞が「空間的な意味」から転じて「比喩的な意味」に変わっていることが多様な句動詞の意味を生み出している。[レイコフ(1986)]

a') down　　故障していて悪い状態＝down にする（cf. 車の状態がよい＝up）
b') in　　自分の身を私たちの家の中に入れる
c') in　　自分自身を対戦相手の支配下の中に入れる
d') on　　自分自身をよい状態の上におく
e') up　　上がって視界から見える状態 up にする
　　（cf. 下がって視界から見えない状態 down）

d') の get on に関して付言すると，大西・マクベイ (2005) は「この on はある活動や出来事と on の状態，つまりそれとくっついて続いている状態である」と説明している。これに従えば，この例文は「あなた自身 yourself がそれまでの無事な日常と今もくっついている」，つまり「それまでの変わらぬ日常が続いている」というふうに解すことが出来る。

これらの文 a ～ e は再帰代名詞を補うことで，安藤 (2005：837) が結果構文として挙げている以下の例文１～４とよく似た構造を持つことが分かる。

1. The gardener watered the tulip flat.
　　園芸家はチューリップに水をやって，倒してしまった。
2. The cook scrubbed the pot shiny.
　　コックは錆をこすって，ぴかぴかにした。

3. Charlie laughed himself into a stupor.
　チャーリーは笑いこけて，ぼうっとなってしまった。
4. Toller had drunk himself into a state of insensibility that evening.
　トラーはその晩飲み過ぎて，正気を失ってしまった。

上記の例文１～４においても，再帰代名詞や前置詞句が出現していることは句動詞の例文ａ～ｅの文構造との類似性を想起させる。また，動詞の後の構成素が主述の関係（ネクサス）を形成していることも確認できる。

以上の考察から，タイプ１の中で能格動詞の自動詞を含むものは「他動詞＋目的語＋副詞」と解すことができ，タイプ５に含めてしまうことが出来るであろう。

タイプ５：他動詞＋目的語＋副詞
e.g.　He saw the crisis / it through. 彼は危機を/それを乗り越えた。

４．１．３　break out, break up　の検討

前節に引き続いて，本節では break を含むタイプ１の句動詞である，break out, break up について検討したい。

４．１．３．１　「能格動詞 + 再帰代名詞 + 副詞」を適用した考え方

break out （戦争・火事などが急に起こる）

1)　War broke out in 1939.　　[Courtney (1983)]
　1939年に戦争が勃発した。
1')　War broke itself out in 1939.
　1939年に戦争が自分自身を壊して，外に出る状態にした。

この場合の「戦争」はまだ「戦争が起きていない状態の戦争」であり，その状態を自ら壊して外に出てきて戦争が勃発するということになる。田中 (1989：211) は「容器のメタファー」の概念を用いて，「容器に見立てられた闘いが壊れて，そして表にでるようになる」と表現している。

break up（解散する）

2) We broke up and went our own way.　[木原(2001)]
　我々は別れて別々の道を行った。
2') We broke ourselves up and went our own way.
　私たちの関係はそれ自体を壊して，upの状態にし，そして・・・

この文においては「私たち」を文脈から「私たちの関係」と捉え直すことで再帰代名詞の意味を確認することが出来る。

「up の状態」のイメージについては，田中 (1989) は「あるものが壊されて部分が上に飛び散る」と説明しているが，一方，大西・マクベイ (2005：108) は「容器の中に水を入れ続けると（つまりupさせ続けると）最後には満杯になってしまいます。この状態は「限度」，また，もうこれ以上入らないところから「終わり」「完全」などのイメージを生み出します」と述べ，break up の up は「完全に」「終わった」の意になると述べている。

前者の説明は up の物理空間的イメージを重視し，後者はそのイメージの発展した結果に焦点を当てている。レイコフ (1993：547) は over の分析において「ごく普通の体験として，動いている物体の経路をたどっていると，それが静止した地点に焦点を置く，ということがある」と述べているが，この up についても同じことが言えるだろう。

また一方で「ネクサス目的語」の考え方を適用して和訳することも可能である。

War broke itself out.
戦争が [それ自身が out の状態となるように] それ自身を壊した。

We broke ourselves up.
私たちの関係が［それ自身が up の状態になるように］それ自身を壊した。

４．１．３．２　自動詞 break に「状況の it 」を補う分析

前節では再帰代名詞を補う検討を行ったが，本節では，break の目的語として「状況の it」を補う検討を行う。文脈に合わせて状況をふくらませて考えてみると次のようになる。

1) War broke out in 1939.　（1939年に戦争が勃発した。）
→ War broke it　　out　　in 1939.
戦争は平和な状態を切断して，outの状態 になった，1939年に。
||
外へ出てくるイメージ

2) We broke up and went our own way.　（我々は別れて別々の道を行った。）
→ We broke it　　up　　and went our own way.
私たちは一緒にいる状態を切断し，upの状態 になった，そして別々の道を行った。
||
切断されて上に飛び散るイメージ

例文 1) の“War broke out.”は，前節の再帰代名詞を補った解釈と「状況の it」を用いて「平和な状態を断ち切る」とする解釈を比較してみると，後者の方が分かりやすい。一方，We broke up.に関しては「状況の it」を補って「一緒にいる状態を切断する」と解することも出来るし，再帰代名詞を補って「私たち自身（の関係）を切断する」と解することも可能である。

ただ，もし We の代わりに She が主語で“She broke up with her boyfriend last week.”（彼女は先週恋人と別れた。）［浅野ほか (2003)］という文になると，「彼女自身を切断する」と解すことは無理が生じるので，やはり「状況の it」を補って，「彼女は it (＝彼との関係)を切断した」となるだろう。

４．１．２ 節で行った My car broke down on the way.（車が途中で故障した）という分析も同様に考えてみると，「状況の it」を補って，My car broke it down on the way. となり，「車が it (= 正常な状態) を切断し，downの状態になった，途中で」と解析できる。なお，break に関しては，その原義は「切断」であり，breakfast は「断食の状態を切断する」から「朝食」となり，「休憩」という意味の break は「仕事を切断する」ことから来ているとセミナーで指摘があった。つまり，これらの名詞においても「断食を切断すること」「(仕事を)切断すること」のように明示的あるいは非明示的に目的語が含まれていることが分かる。

以上のことから，break（自動詞）を含む句動詞において，再帰代名詞を取るか「状況の it」を取るかは文脈によって決まることが分かる。

４．２　自動詞しかないもの（非対格動詞）の分析

前節ではタイプ１に分類される句動詞のうち，自動詞が能格動詞になっているものの考察を行ったが，本節ではタイプ１の自動詞が非対角動詞になっているものについて考える。［註４］
再び，安藤 (2005) の例文を用いるが，ここには再帰代名詞を補うことは出来ない。

1) The handle has come off.　柄が取れた。
2) The prices came down.　物価が下がった。
3) The two men have fallen out.　２人の男は仲違いした。

これらの文はSVA型で，「～(S) が 副詞の状態(A) に変化する(V)」と解すことができる。come は「こちらへ来る」という意味から「～になる」という意味に，fallも「下へ落ちる」という意味から

「よくない状態になる」という意味に使われている。どちらも空間的な移動の意味から比喩的な変化を表す意味に変わっている。[大西・マクベイ (1999)]

例文１の副詞は空間的な「分離」の意味で使われているが，例文２のdown，例文３の out は共に空間的な意味から拡張された抽象的な意味で用いられている。

1') The handle has come off.
　柄が off の状態（＝柄の付いていたものから離れたoffの状態）になった。

2') The prices came down.
　物価（目には見えないが存在して目に見えるものに見立てている）が down の状態（＝下降した状態）になる。

3') The two men have fallen out.　２人の男は仲違いした。
　２人の男が out の状態（＝仲のよい正常な状態から外に出た状態）になった。

[註５]

これらの文においては，AがVの補部としての役割を果たしている。安藤 (2005：17) はMary went away (yesterday).の went away をひとつの句動詞とみなしてこの文をSV型としているが，上記の例文と同様に「away の状態に変化した」と解すことも可能であろう。

まとめると，純粋な自動詞（非対格動詞）においては，その構成素の比喩的な意味に着目することでその意味が理解しやすくなる。

４．３　タイプ１の句動詞のまとめ

ここまで，タイプ１の句動詞を「自他両用動詞」と「純粋な自動詞」に分けて論じてきたが，それぞれ次のようにまとめることが出来るだろう。

a.　自他両用動詞
　再帰代名詞が有効な場合・・drop in, give in, get on, show up, (break up)
　「状況の it」が有効な場合・・break out, break up, break down

b.　純粋な自動詞
　構成素（動詞と副詞）の比喩的な意味に着目して解する

タイプ１の自他両用動詞（能格動詞）には，再帰代名詞を補って「ネクサスの関係」を作って解したり，あるいはまた「状況の it」を補って解すことで構成素の意味から句動詞の意味を再現できることが分かり，T's Hypothesis の有効性が確認された。

５．タイプ２の句動詞の分析

タイプ２は「自動詞＋前置詞」型の句動詞である。安藤 (2005) はこのタイプの句動詞群を受け身になれる，なれないで大きく２分している。

a. 受け身になれるもの
　1)　Don't hesitate to ask for advice. ためらわずに助言を求めなさい。
　2)　I will call for you by three.　３時までにお誘いに参ります。
　3)　I can't do without this dictionary.　私はこの辞書なしでは済ませられない。
　4)　I must look into this matter.　この件を調べて見なければならない。
　5)　I'll see to the matter at once.　すぐその件を手配しましょう。

b. 受け身になれないもの
　6)　I don't care for that color.　その色は嫌いだ。
　7)　What does UN stand for?　UNって，何を表しているのですか。

8) I am waiting for the bus.　バスを待っているのです。

9) The boy takes after his father; he has the same red hair, big feet, and quick temper.
少年はお父さんそっくりだ。赤髪に大足，かんしゃく持ちまで一緒だ。
［この例文はCourtney (1983)］

次節ではまず，前者の代表として do without を，また後者の代表として take after を取り上げて検討する。

５．１　do without の場合

例文３に出てくる do without という句動詞の分析に関しては，寺島 (2000) が「状況の it」を補って解する分析を行っている。寺島はまず以下のような do の例文を挙げ，do があらゆる名詞を目的語にとり，それらの多様な目的語を代名詞 it で代用したり，時にはそれを省略することもあることを突き止める。

1) Please help me do the room. 部屋の掃除を手伝ってちょうだい。
2) Do the garden [the wash, the dishes, the flowers] 庭いじりをする ［洗濯をする，皿洗いをする，花を生ける］
3) do one's hair [one's teeth, one's nail] 髪を整える［歯を磨く，爪の手入れをする］
4) Have you done breakfast [reading]?　朝食は済みましたか。[本は読み終えましたか。]
5) I've done it. 終わったぞ。
6) Now I have done [φ].　さあ終わった。

そして，Can you do with bread and milk for lunch? という文は　Can you do [it] with bread and milk for lunch?「昼食のためにパンと牛乳を食べることによって食事をすましていいですか」のように，また I can't do with his arrogance.という文は I can't do [it] with his arrogance.「彼の横柄さに関しては，私は自分の気持ちを処理できない」とその文における「状況の it」をふくらまして和訳している。

do without においてもこの考え方を適用して以下のように考えている。(it の表す状況については山田が「ふくらまし和訳」している。)

I can't do [it] without this dictionary.
私はこの辞書なしでは私が読み書きする仕事を処理することは出来ない。
→　この辞書なしでは私は済まされない。
The prisoners found it very difficult to do [it] without tobacco.
捕虜たちはタバコなしで自分たち置かれた苦しい状況を過ごすことを辛いと感じた。
→　捕虜たちはタバコなしでいるのが実に辛かった。

寺島 (2000) は，辞書においては「自動詞」と分類されている do に「状況の it」を補って文意の中に隠された「その状況」を掘り起こして考えれば，句動詞の意味はその構成素から復元することが出来，「do with～ を処理する」「do without～ なしで済ます」のように丸暗記する必要がなくなると主張している。

寺島の分析で注目したいのは，do に関する様々の例文を検討して，それから「状況の it」の挿入を仮定しているところである。今後の論証を進める際にも目的語を補った形が他動詞用例の中にも存在することをその都度確認していきたい。

５．２　take after の場合

Dixon (1990：270) は句動詞 take after, take up, take on の中の take と単独の take は意味が全く異なると述べている。

The root of a phrasal verb is used alone, but its meaning in a phrasal verb is quite different from its meaning when used alone. Thus we have the simple transitive root *take*, and also phrasal verbs such as *take after* 'resemble (e.g. one's mother)', *take up* 'practice (e.g. medicine)', *take on* 'accept (e.g. new responsibilities)'. The meaning of a phrasal verb cannot be inferred from the meanings of its constituent root and preposition; it must be regarded as a separate lexeme.

Dixon が同書で挙げた 3 つの句動詞のうち，特に take after に関しては，安藤の分類で明らかにされたように受動態にすることが出来ない。それゆえ「他動性」が極めて低く，look like のような「連結動詞」として意識され，目的語を補うという発想は一番出てきにくいと推測される。しかし，その take after を田中 (1989,1990) は「動詞＋前置詞」とみなして，次のような分析を行っている。

take after「血縁関係のある年長者に似る，人を手本とする」

Linda takes after her mother in many ways.

(リンダは，多くの点で母親に似ているね。)

「似ている」の意味においては，「遺伝の法則に従い，後から特徴を取り入れる」と解釈する。(1989：142)

'Take after (似る) においては，XとYの 2 人を想定し，Xが後ろからYのなんらかの特徴を（遺伝の法則によって）取り入れていくと考えれば，その意味と take after の結びつきが理解できるだけでなく，Yは親や祖父など＜年上の＞＜親族＞であるという使用条件も同時にある程度理解できよう。(1990：69)

この説明から田中 (1989,1990) は take の目的語として「何らかの特徴」を補って考えていることが分かる。Simpson et al. (1989)の記述を借りれば，nature, character, habits, appearance, or other quality が取り入れられるものになる。

この点に関して，山田 (1999b) は take after の目的語を oneself と見なして以下のように分析したことがある。

She takes herself after her mother.

After は元来，時間空間の前後関係を示すので，ここでは，「お母さんの後に来て，その容姿を真似て」と考える。

だから，「彼女は自分自身の容姿をお母さんの容姿からもらってとる。」となって，「彼女はお母さんに似ている。」という意味が出てくる。

Take after は，単純に look like と同意ではなく，目的語が「直系の親族をあらわす語」に限られる理由もこれで説明できる。

しかしこの山田の分析は，3．1で紹介した田中 (1990) の take off, take to の分析におけるoneself の挿入と比較してみると，無理があることが分かる。「飛行機が自分自身を取り込んで滑走路から離れる」「彼が自分自身を取り込んで酒を飲んでいる状態に持って行く」においては，取り込まれるのはまさに「それ自身」であるので再帰代名詞で問題はないが，「彼女が彼女自身を取り込んで似ている状態になる」というのは意味を成さない。「取り込まれる」のは「after の目的語の属性である性格や容姿など」である。またそう考えれば「～を手本にする」という意味があることも理解できる。

ただ，田中の説明においては，「after+目的語」に関する部分がやや不十分であるように思われる。「Xが後ろから　Yのなんらかの特徴を（遺伝の法則によって）取り入れていく」の下線部については，「Yの後を追って」→「Yに従って」「Yに倣って」「Yを真似て」としたほうがより分かりやすいのではないだろうか。

X take ϕ [after Y] → Xが [Yを真似て] Yの何らかの特徴を取り入れる

句動詞 take after に関して，Dixon(1990) の見解とは対照的な，田中 (1989, 1990)，山田 (1999b) の見方を述べてきたが，結論としては take after には文脈に適切な目的語を補って考えれば，その構成素 take の意味と句動詞全体の意味を十分に関連づけられるということである。５節の例文9. The boy takes after his father, he has the same red hair, big feet, and quick temper.においては，「赤髪，大足，かんしゃく」が takes の自明の目的語として省略されていると考えられるだろう。

しかし，さらに次のようにも考えることも出来るだろう。 takes に「状況の it」を補って，その it の状況としては「少年が父親から遺伝的に譲り受けているもの全て」と解する。そうすると，red hair, big feet, quick temperというのは「譲り受けている全て」の中から話者が際だった特徴の例として挙げているものと考えることが出来，より自然な文意の解釈が可能となる。

５．３　他の「タイプ２の句動詞」への応用

５．３．１　タイプ２「受け身になれる」句動詞

５．１節で紹介した寺島 (2000) の手法は「状況の it」を補って考えるというものであったが，ここでは文脈から自明であると考えられる目的語を補って次のように考えてみた。

(1)　Don't hesitate to ask for advice. ためらわずに助言を求めなさい。
　　<Don't hesitate to ask [me] for advice.

(2)　I will call for you by three.　３時までにお誘いに参ります。
　　<I will call [you] for you by three.

(3)　I must look into this matter.　この件を調べて見なければならない。
　　<I must look [this matter] into this matter.

(4)　I'll see to the matter at once.　すぐその件を手配しましょう。
　　<I’ll see [the matter] to the matter at once.

例文（１）の ask については，He asked me for advice.のように用いられることから何ら問題はないであろう。文脈から自明の目的語が省略されている。

例文（２）については，He called my name. (彼は私の名前を呼んだ)，The teacher called the roll. (先生は名簿を読んで出席を取った）といった文から推測して目的語を補い，「あなたを大声で呼ぶ call you，あなたがいるかどうかを尋ねて for you」とふくらまし読みすることが可能である。

例文（４）については，「この件にまず視線を向けて look this matter，それからその中に入り込んで詳しく調べる into this matter」と解してはどうだろうか。またlookの他動詞例文としては，副詞句を伴った表現であるDon't look a gift horse <u>in the mouth</u>. (諺：贈りものにけちをつけるな)，He looked me <u>in the eye</u> and told me I was a fool.（彼は私に面と向かって君はバカだと言った）といったものがある。

例文(５）については，まず目的語とtoの前置詞句を持つ Just a minute. Tom will see you to the bus stop.（ちょっと待って。トムがバス停まで送るから）という文で考えてみる。この文は「あなたを見る，バス停に到着するまで」と解せるので，同様に例文５を考えると「その件を見る，その件が手配された状況に到達するまで」となる。ふたつ目の the matter は単に「その件」ではなくて，到達する目的地として「その件が手配された状態」の意味になっている。以下の２例における下線部においても同様な解釈ができる。

(a)　You go and play, I'll see [the dishes] to the dishes.
　　<u>皿洗いは私がする</u>から遊んでらっしゃい。　　[木原(2001)]
　　＜現在の洗っていない皿を見る，その皿が洗い終わっている状態になるまで

(b)　Who is seeing [the arrangements] to the arrangements for the next meeting?
誰が次の会合の準備をしているのですか。　[小西(1985)]
＜準備していない状態を見る，それが準備された状態になるまで

5．3．2　前節「タイプ 2「受け身になれる」句動詞」の再検討

前節においては「自明の目的語」として「同一のNP」を補って 4 つの句動詞の分析を行ったが，「状況の it」を目的語に補って思考実験してみたらどうかという指摘をセミナーで受けたのでひとつひとつ検討してみる。

5．3．2．1　call for の再検討

例文 2 I will call for you by three.（3 時までにお誘いに参ります。）については，「状況の it」を call の目的語とする場合 (a) と，you をcall の直後に移動させて for の目的語とする場合 (b) が考えられる。

a. I will call it　for you　by three.
私はそれを大声で呼ぶ，あなたを求めて，　3 時までに
||
?

b. I will call you　for it　by three.
私はあなたを大声で呼ぶ，それを求めて，　3 時までに
||
?

call の原義が「大声で呼ぶ」[小西ほか (2001)] であるので，やはり呼ぶ対象としては「人」が想定されるだろう。したがって，思考実験として行った例文 (a) は不適切と判定される。

例文 (b) については，「それ」の内容として「誘いに来た理由」を考えることが出来，「あなたを大声で呼ぶ，それ（＝誘いに来た理由）のために」と解することが可能となる。

ここでさらに，call for の他の例文も併せて検討する。この例文においては for の後に来るのは「人」ではなく「物」や「事」であり[竹林ほか (2002)]，例文 (b) の妥当性を裏付けるものとなっている。

(1)　He called for help.　彼は助けを求めて叫んだ。
(2)　The clerk called for an ambulance.　店員は救急車を呼んだ。
(3)　A typhoon is approaching. The situation calls for caution.
台風が接近している。警戒が必要だ。

これらの 3 例においても同様に for の目的語を call の後ろに移動して，for it とすることは出来ない。なぜなら，call の目的語としては call される対象としての「人」が「自明の目的語」として要求されるからである。以下の (1'), (2'), (3') において，可能性として考えられる「自明の目的語」を補ってみた。（なお，(2') における the fire station は「人」ではないが，the people working at the fire station の意味の換喩である。）

(1')　He called [the people around him] for help .
(2')　The clerk called [the fire station] for an ambulance .
(3')　A typhoon is approaching. The situation calls [us] for caution .

以上のことから，I will call for you by three.という文においては，call のあとには「自明の目的語」として「呼びかけられる対象＝you」が削除され，for の後には「状況の it」が削除されていると結論づけられる。[註６]

５．３．２．２　look into の再検討

英文 3 に関しては，セミナーにおいて，look を無理に他動詞として解する必要はなく，「視線を向ける」という意味の自動詞として解すればよいのではないかという指摘を受けた。つまり，この句動詞には自明の目的語と考えられる「視線」は動詞自体に含まれているということである。

3.　I must look into this matter. この件を調べて見なければならない。
山田案　　I must look [this matter] into this matter.
改定案　　I must look into this matter.
　　私は視線を向けなくてはならない，そしてこの件の中に入っていく

「look＋前置詞」の表現については，他にも以下のようなものがあるが，いずれも「視線を向ける」＋「その視線の動き」と考えればその意味をすぐに取ることが出来る。[註７]

look for ～　　視線を向ける＋ ～を求めて　→　～を探す
look after ～　　視線を向ける＋ ～を追って　→　～の面倒を見る
look over ～　　視線を向ける ＋ ～の上を覆うように　→　～を調べる
look through ～　視線を向ける＋ ～を通り抜けるように　→　～に目を通す
look to ～　　視線を向ける＋ ～の方向に到達するように　→　～を当てにする

５．３．２．３　see to の再検討

例文 4　I'll see to the matter at once. については，前置詞は「状況の it」を補って to it と考えて文末に置き，the matter を動詞 see の目的語と解してはどうかという指摘をセミナーで受けた。

山田案　I'll see [the matter] to the matter at once.
改定案　I'll see the matter　　to it　　at once.
　私はその件を見るつもりです，それに達するまで，すぐに
　　||
　　その件が手配された状況
　→ 私はその件を見届けるつもりです，それが目的の地点に達するまで
　→ その件を手配します。/ その件を適切に処置します。

改定案に従って，前置詞の目的語と思われたものを自動詞 see の目的語と見なし，前置詞 to に「状況の it」を補って解すると，山田案が行っていた「同一の目的語を異なる意味に解する」という不自然さを避けることが出来る。

５．３．３　タイプ２「受け身になれない」句動詞

本節では「受け身になれない句動詞」として分類されたタイプ２のものについて検討する。

(6)　I don't care [φ] for that color. その色は嫌いだ。
(7)　What does UN stand [itself] for? UNって，何を表しているのですか。
(8)　I am waiting for the bus. バスを待っているのです。

例文(6) の care については，自動詞用法においては about もしくは for を取り，他動詞用法として掲げられているものも to 不定詞あるいは節を取る場合でも about を省略したものであると書かれている [小西 (1985)]。したがって，これを他動詞と見なして何らかの目的語を補うことは出来ない。

care の原義を見てみても「注意を払い気を使うこと」[小西ほか (2001)] とあるので目的語を含み持っていると考えれば，「その色に対して気を使わない」→「その色に対して無関心である」→「その色が好きでない」→「その色が嫌いだ」と解することが出来る。

例文(7) については，「UNが…の代わりに自らを立てている」と解すことが出来る。standは他動使用方法として，They stood the ladder against the wall.（はしごを壁に立てかけた）[ibid.] のような文があり，「立つ」と「立たせる」の 2 義を持つ能格動詞とみなすことが出来るだろう。[註 8]

次に例文(8) の wait for について検討する。4．2 節では Quirk et al. (1985：1169) からの引用として，wait を純粋な自動詞の例としてあげたが，実際には「他動詞」としての用例も辞書には記載されている。

(a)　wait one's chance [opportunity] 機会を待つ
(b)　Don't wait lunch for us.
　　私たちが来なくても昼食を始めていて下さい。　[小西ほか (2001)]

ある動詞の「自」「他」は目的語の有無によって決まるのであるが，実際に目的語の出現，非出現を決めるのは文脈や前後関係によることから，自動詞と他動詞はお互いに「相互浸透」の関係にあると言える。

wait for についても「状況の it」を補って解することが可能となる。

(c)　I am waiting [it] for the bus.
　　私は今の状況を見守っている，バスが来るのを求めて。

wait の原義は「見守る」で watch, wake と共通の語源を持っている。waiter（給仕）は「レストランなどでお客の食事の状況を見守る人」ということになるだろう。なお，watch には他動詞用法の他に，「watch for the train 今か今かと列車を待つ」[小西ほか (2001)] のような使い方もあり wait との繋がりを連想させる。

この「wait it for the bus，it ＝ <今の状況>」という解釈に対して，「wait the bus for it」と考えたらどうかという指摘をセミナーで受けた。つまり，「バスを待つ，どこかへ行くために」と説明できる。前者の説明では，「it ＝ 今の状況」というのは漠然としてつかみ所のない感じがするが，後者においては，文脈によって「会社に行くために」とか「学校に行くために」などとはっきりとイメージを思い浮かべることが出来る。

この wait for の考察からも，T's Hypothesisの検証においては，可能なケースを全て出して検討してみる作業，すなわち「思考実験」が大切であることが分かる。[註 9]

５．３．４　他のいくつかの「タイプ２の句動詞」の分析

５．３．４．１　「再帰代名詞」を適用する例

次に示す turn on, get at においては再帰代名詞を補うことが出来る。

turn on（急に…を襲う）

The dog went mad and turned [itself] on his own master. [Courtney (1985)]

→　その犬は狂ってそれ自身（その狂気）を自分の主人に向けた。

→　その犬は狂って自分の主人を襲った。

get at （〜を叱る）

She's always getting [herself] at the children for one thing or another. [ibid.]

→　彼女はいつも自分自身（自分の気持ち）を，子どもに向けた状態で持っている，あれやこれやの理由で

→　彼女は子どもをいつも叱っている，あれやこれやの理由で

５．３．４．２　「自明の目的語」を適用する例

５．３．４．２．１　add to の場合

酒井 (2005) はadd to（…を増す）について次のような説明をしている。

まず，add A to B「AをBに加える」のAとBは普通，異なるもの同士になる。

We added another room to our house.

自宅に一部屋建て増しした。

ところが，問題の add to〜 は，add A to B がたまたま一致したために，Aの方が省略されて成立した表現と考えられる。

The work added a reputation to her reputation.

その仕事は彼女の名声に名声を加えた。

The work added　ϕ　to her reputation.

その仕事は彼女の名声をますます高めた。

酒井は「AとBがたまたま一致した」と述べているが，文意に沿って考えれば，Aの方は「新しく付け加わった名声」であり，Bの方は「それまでの名声」である。その違いは文意から自明に導き出される。従って，add to に補う目的語Aは「自明の目的語」となる。

５．３．４．２．２　approve of, refer to の場合

approve of（…に同意する）においては，「自明の目的語」として me を補う。

My father did not approve [me] of my marriage to Mary. [Courtney (1985)]

→　私の父は私に同意しなかった，私とメアリーとの結婚に

→　私の父は私とメアリーの結婚に同意しなかった。

refer to (〜に言及する) も同様に，自明の目的語として me を補うことが出来る。このことは，I referred him to a doctor. (私は彼に医者に行くように言った。[木原 (2001)]) という文例があることから間違いないだろう。[註 10]

Who are you referring [me] to?　誰のことを言っているのですか。[ibid]

5．3．4．2．3　make for の場合

次に示す make の一連の句動詞（タイプ２）では one's way が自明の目的語として削除されていると考えられる。

1. We saw the party making for the river.
   その一行が川の方へ進んでいくのが見えた。　[竹林ほか (1995)]
   → make our way for the river
   川に向かって自分の道を作る
2. The ship made for the shore.
   船は沿岸に向かって急いで進んだ。　[小西ほか (2001)]
   → made its way for the shore　沿岸に向かって自分の道を作った
3. He made toward home.
   彼は我が家へと歩を進めた。　[勝俣 (1958)]
   → made his way toward home　家の方向に自分の道を作る
4. The bear made at the man with great force.
   クマはすごい力でその男に襲い掛かってきた。[田中ほか (2003)]
   → made its way at the man　その男を目がけてその道を作った
5. The cat made after the cat.
   犬が猫の後を追った。　[ibid.]
   → made its way after the cat　猫を追ってその道を作った

5．4　タイプ２の句動詞のまとめ

以上検討してきたタイプ２（自動詞＋前置詞＋NP）の句動詞は補う目的語（**NP**）の種類と位置によって以下のように分類されることになる。

1. 自動詞＋前置詞＋NP　・・・**NP**を補わずに解する
   e.g.　look into, stand for, care for
2. 他動詞＋**NP**＋前置詞＋NP　・・・として解する
   a. **NP**＝状況のit
      e.g.　do it without NP, take it after NP
   b. **NP**＝再帰代名詞
      e.g.　turn oneself on NP, get oneself at NP, take oneself to NP
   c. **NP**＝自明の目的語［註 10］
      e.g.　ask somebody for NP, refer somebody to NP,
      approve somebody of NP, make one's way for NP,
      add NP' to NP
3. 他動詞＋NP＋前置詞＋**NP**　・・・として解する
   a. **NP**＝状況のit
      e.g.　call NP for it, see NP to it, wait NP for it
   b. **NP**＝再帰代名詞　　e.g.　該当なし
   c. **NP**＝自明の目的語　　e.g.　該当なし

ここで確認しておきたいことは，同じ動詞であっても，補う目的語**NP**が異なってくることである。これは付随する前置詞句の違い，大きくは文脈の違いが反映していると考えることが出来るであろう。

take after NP　NPに似ている
＜take it after NP　NPを後から真似て it（様々な遺伝的特徴）を取る

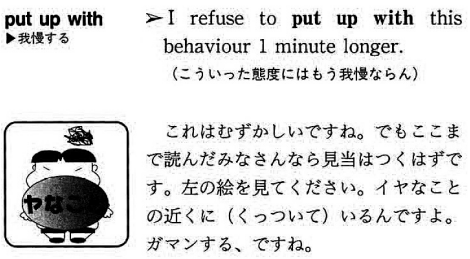
take to NP　NPに没頭する，NPが習慣になる
＜take oneself to NP　自分自身を取り込んで，NPに到達させる

6　タイプ３の句動詞の分析

タイプ３は「自動詞＋副詞＋前置詞」の形をしたものである。このタイプの典型例としてput up with（…を我慢する）と put up at（…に泊まる）をまず取りあげたい。

6．1　put up with と put up at の比較分析

筆者は以前に，山田（1999b）においてput up with（…を我慢する）に再帰代名詞を補って put oneself up with とし，その説明として，「自分自身の気持ち oneself が（本当は…によって気持ちが下向きになるところを）上向きの状態 up に置くことから ＜我慢する＞ の意が生ずる」と分析した。



しかし最近，大西・マクベイ（2005：104）において右のような説明を見つけ，「状況の it」を補って考えることも出来ると考え始めた。

同書は様々の不変化詞の意味の拡張について，軽妙な語り口と楽しいイラストで説明しているのだが，この up に関しては，「上がってくる」（上昇）から派生した「近づいてくる」（接近）という意味であると述べている。catch up（追いつく），keep up with（…に遅れずについていく），call up（電話をかける），live up to（…の期待にそう），come up to（…に達する），back up（支援する）といった句動詞の後にput up withを挙げ，この up は「ヤなことが体にくっついてくる」感じであると述べている。

この説明を受け入れるならば，put it up with NPにおける it は with の目的語と同一のものと考えられる。すなわち，「状況の it ＝ NP ＝ 我慢する対象」ということになる。

これに対して，それと非常によく似た形をしている put up at（…に泊まる）は put oneself at と解するのが妥当である。なぜなら，put up には次の例文2，3のような他動詞の用法があるからである。

1. Where can you put up tonight?　?　We can put up at a hotel, or with friends.
2. Can you put us up for the weekend?　?　I can put up two adults, but no children.
3. I can put up one more person on this seat which folds down into a bed.

[Courtney(1983)]

安藤（2005：798）には「動詞の中には，目的語が省略されたために，１項動詞のようにみえるものがある。」という記述がある。そしてそのひとつの例として「特定の再帰代名詞が了解されている

場合」を挙げ，I'm shaving.（ヒゲを剃っているところだ），They're dressing.（彼らは服を着ているところだ）という例文を示しているが，上記の put up at もその一例と考えていいだろう。なお，この場合の up は昔の宿屋が宿泊客を 2 階に (up) 泊めたことに由来する。

以上のことから，句動詞のタイプが同じであっても，不変化詞の意味の違いによって補う目的語が異なってくることが再び確認された。

S	V	O ＝ ネクサス目的語		M
NP（経験者）	put	[it（対象）	up]	with NP（対象）
NP（行為者）	put	[oneself （受動者）	up]	at NP（場所）

6．2　put up with 再考

前節の結論に対して，どちらも再帰代名詞を補えばそれぞれの句動詞の意味が説明でき文型の区別をする必要はないのではないかという指摘がセミナーであった。それに従って考えると以下のようになる。

I refuse　to put myself up　with this behavior.
私は拒否する　自分自身をupの状態に置くことを，　この振る舞いに関して
||
（この振る舞いに）近づいた状態

…，I put myself up　with my grandfather, ….
私は自分自身をupの状態に置いた，　おじいさんと一緒に
||
泊まる部屋のある階上に

従って，put up at（〜に泊まる）と put up with（〜を我慢する）というふたつの句動詞においては，どちらも「再帰代名詞＋up」をネクサス目的語として設定すれば，その独自の意味を構成素から説明できることになり，先に示した仮説は以下のように訂正される。

S	V	O ＝ ネクサス目的語		M
NP_1（行為者）	put	[oneself （受動者）	up]	with NP_2（対象）
NP_1（行為者）	put	[oneself （受動者）	up]	at NP_2（場所）

なお，put up withという句動詞の原義においてはSとしてのNP_1 は oneself に動作を及ぼす「行為者」であるが，3 語がひとつのまとまった固まりで他動詞と見なされる時にはNP_1 はNP_2（対象）に対する「経験者」となる。[註11]

6．3　その他の「タイプ 3 の句動詞」の検討

ここまで put up with と put up at をタイプ 3 の典型モデルとして分析してきたが，本節では安藤 (2005) が同書でタイプ 3 の例文として挙げている 5 例を検討する。

1. They always looked down on us as poor relations.
   彼らは私たちを貧乏な親類としていつも見下していた。

2. We have just run out of sugar.
　ちょうど砂糖を切らしてしまった。
3. I must make up for lost time.
　空費した時間の埋め合わせをしなければならない。
4. I was listening in on the radio then.
　その時ラジオを聴いていた。
5. The old man cannot keep up with the times.
　その老人は時世に遅れずについていくことができない。

６．３．１　look down on　について

例文１の look については，５．３．２．２節で行ったように，「look ＝ 自動詞」とみなして次のように考える。

look　　down　　on us
視線を向ける　その視線は下向きである　私たちの上に落ちる
→　私たちの上に下向きの視線を向ける
→　私たちを見下す。

６．３．２　run out of について

例文２においては，run の目的語として再帰代名詞 ourselves を補う。

a. run ourselves　　out of sugar
　自分自身を走らせる　砂糖あるところから外へ
→　自分自身を砂糖のあるところから外へ走らせる
→　砂糖のないところへ走って出る
→　砂糖が無くなる

上記の分析に対して，run は自動詞「走る」のほうを無標とみなして説明したほうがよいのではないかという指摘をセミナーで受けた。

b. run　out of sugar
　走る　砂糖あるところから外へ
→　砂糖のあるところから走って出る
→　砂糖が無くなる

６．３．３　make up for について

例文３においては，まず「状況の it」を補い，次にそれを文意に合わせてふくらませてみる。

make it up
→　それが up の状態になるように作る
→　失われた時間のために空いた空洞を上まで満たすように作る
＋　for lost time
　→　失なわれた時間に心を向けて
　→　失われた時間を求めて

併せて考えると，　make it up for lost time

→　失われた時間を求めてその空洞を満たそうとする。
→　失われた時間の埋め合わせをする

次に，思考実験としてmake の目的語として再帰代名詞を補って考えてみると，I must make myself up（私は自分自身を up の状態にしなくてはならない）for lost time.（失われた時間を求めて）となるが，upの意味として「上」「良い」「元気」「意識」「増大」「接近」「満杯」などから適当な意味を見つけることは出来ない。

木原 (2001) には次のような例が記載されており,「状況の it」を補うことの正しさを裏付けている。

How can we make it up to you for all that you have suffered because of us?
私たちがお掛けしたご苦労に対してどうしたら償いができるでしょう。

この他に，自動詞の分類として出てくる make up の句動詞には次のようなものがあり，それぞれ次のように解するとその意味が理解しやすい。

a.　He made up as a cowboy.　彼はカウボーイに扮した。　[竹林ほか (2002)]

He made <u>himself</u> up as a cowboy.
彼は自分自身がupの状態（完成している状態）を作った，カウボーイとして

b.　Some employees tried to make up to their boss after the contract re-negotiations failed. 契約の再交渉がうまくいかないと上司に取り入ろうとする社員もいた。[スペースアルク http://www.alc.co.jp/]

make <u>themselves</u> up to their boss
自分自身がボスに up の状態（近づく状態）を作る

c.　I want to make up with him right now. 今すぐ彼と仲直りしたい。　[ibid.]

I want to make it up with him right now.
私は<u>それ</u>がupの状態（よい状態）を作りたい，彼に関して，今すぐに
||
彼との関係

また，例文 a と例文 c に対しては，それぞれ以下のような他動詞用例の存在が上記の解釈の正しさを裏付けている。[ibid.]

make oneself up　お化粧をする
make it up with　〜と和解する，仲直りする

なお，make の用法については，次のような「状況の it」を含んだ表現がたくさんある。

I made it.　うまくいったぞ。やったぞ。

I'm sure he'll make it into college.　彼はきっと大学に入れるよ。
I took a taxi and just made it.　私はタクシーに乗ってやっと間に合った。
They made it to the other side of the river. 彼らは川の反対側にたどり着いた。
He made it on just in time.　彼はやっと間に合って乗った。
She made it up the hill first.　彼女は丘の上に一番乗りした。
I can't make it this Saturday.　今度の土曜日はまずい。
［以上，竹林ほか (2002) より］

ここまで make up for（〜の埋め合わせをする）に関連して，make up with（〜と仲直りする），make up（扮する），make up to（〜に取り入る）も検討してきたが，「再帰代名詞」か「状況の it」のどちらかを補えば，その句動詞の意味を説明できることが分かった。

６．３．４　listen in on について

例文４の listen には他動詞として目的語をとる文例はないので動詞の直後に it を補うことはしない。「耳を傾ける」という方向性を持つ意味があるので，その方向に真っ直ぐ向かうときは to…，何かを求めようという気持ちの時は for…，何かの中に入り込む感じの時は in…が後に続く。[参考：大西・マクベイ (1999：144)]

これに関しては，これまで行った非対格動詞の分析と同様に，副詞 in を文脈の中でふくらませて解する。listen in を listen in it として，「ラジオから聞こえる番組の中に耳を傾ける」，on the radio「その気持ちがラジオの上に注がれる」とすれば，listen in on the radio の意味がよく分かるのではないかと思う。

上記の分析に対して，「ラジオから聞こえる番組の中に聞き入るように耳を傾ける，その耳はラジオ受信機にくっつくばかりになっているほどである」と解してはどうかという指摘をセミナーで受けた。「くっつくばかりになっている」は on の原義「接触している」から来ている。

６．３．５　keep up with について

例文５は再帰代名詞 himself を補って考えると分かりやすい。

keep himself up　＋　with the times
→　彼自身が up の状態であるように保つ　＋　時世に関して
→　彼自身が近づいているように保つ　＋　時世に関して
→　彼自身が時世に近づいているように保つ
→　時世に遅れないようにする

６．４　さらにいくつかの「タイプ３の句動詞」の検討

６．４．１　catch up with（…に追いつく）の場合

The dog ran as fast as he could to catch up with the car.　[Courtney (1985)]
その犬は車に追いつくために出来るだけ早く走った。

(a)　…. to catch [it] up with the car.
それ（＝？）を捕らえて，近づいた状態にする，車と
(b)　…. to catch [himself]　up with the car.
自分自身を捕らえて，近づいた状態にする，車と
(c)　…. to catch　the car up with [it].

車を捕らえて，近づいた状態にする，それ（＝？）と

(d.) …. to catch the car up with [himself].

車を捕らえて，近づいた状態にする，自分自身と

「車に追いついた」という意味に最も近いのは (d) であろうか。また，catch の目的語としてthe car を考えるのは，「He couldn't catch up the leader. = He couldn't catch up with the leader.（彼は先導者に追いつけなかった）」という記載がある[小西ほか(2001)] ことからも妥当性があると思われる。

6．4．2　end up in（結局…になる）の場合

He'll end up in prison if he goes on behaving like that. [Courtney(1985)]

そんな行動を続ければ彼は結局刑務所に入ることになる。

(a) He'll end [it] up in prison

それ（＝ 彼の人生）を up の状態（完了の状態）で終える，刑務所の中で

(b) He'll end [himself] up in prison

自分自身を up の状態（完了の状態）で終える，刑務所の中で

この例をみると，「状況の it」も再帰代名詞のどちらも補充目的語として取りうることが分かる。そこで，他の用例 [スペースアルク http://www2.alc.co.jp] でも検討してみる。

(1) end up in a brothel　売春婦となる

→ She ended [it ＝ 彼女の身上] up in a brothel.

She ended [herself] up in a brothel

(2) end up in a financial bind　（結果的に）経済的苦境に陥る

→ The country ended [it ＝ ？] up in a financial bind.

The country ended [itself] up in a financial bind.

(3) end up in a quarrel　けんか別れする

→ The two ended [it ＝お互いの関係] up in a quarrel.

The two ended [themselves] up in a quarrel.

(4) Exaggeration might end up in fraud.　あまり誇張すると詐欺になるかもしれません。

→ Exaggeration might end [it ＝ ？] up in fraud.

→ Exaggeration might end [itself] up in fraud.

用例(1)と(3)では「状況の it」も想定されるが，しかしその意味は「再帰代名詞」を文脈の中でふくらまして解釈することによって得ることも可能である。従ってend up in に補うべき自明の目的語としてはより一般性のある再帰代名詞とする。

6．4．3　get through with（…を終える）の場合

I'll telephone you when I get through with this pile of papers. [Courtney (1985)]

この書類の山を片づけたらあなたに電話します。

(a) I get [it] through with this pile of papers

それ（＝？）が through の状態を得る，書類の山に関して

(b)　I get [myself] through with this pile of papers
自分自身が through の状態を得る，書類の山に関して

(c)　I get　this pile of papers　through with [it].
書類の山が through の状態を得る，それ（＝？）に関して

d.　I get　this pile of papers　through with [myself].
書類の山が through の状態を得る，自分自身に関して

ここでの副詞 through の意味は，「何かを通り抜ける動作」ではなく，「通り抜けたその結果の状態」に焦点が当たっている「完了」の意味である。４通りの思考実験を行ったが，(a) において「それ」を「書類の山に関して行う仕事」とすれば一番自然な解釈となるだろう。

６．５　タイプ３の句動詞のまとめ

第６節で検討したタイプ３の句動詞を整理すると以下のようになる。

1.　自動詞＋副詞＋前置詞＋NP　・・・**NP**を補わずに解する
　　e.g.　listen in on NP, look down on NP, run out of NP

2.　他動詞＋**NP**＋副詞＋前置詞＋NP　・・・として解する
　a. **NP**＝状況の it
　　e.g.　make it up for NP, make it up with NP
　　get it through with NP
　b. **NP**＝再帰代名詞
　　e.g.　put oneself up with NP,　put oneself up at NP,
　　make oneself up to NP,　keep oneself up with NP
　　end　oneself up in NP,
　c. **NP**＝自明の目的語
　　e.g.　該当なし

3.　他動詞＋NP＋副詞＋前置詞＋**NP**　・・・として解する
　a. **NP**＝状況の it　　e.g.　該当なし
　b. **NP**＝再帰代名詞　　e.g.　catch NP up with oneself
　c. **NP**＝自明の目的語　　e.g.　該当なし

タイプ２の句動詞のまとめ５．４節でも述べたが，タイプ３の句動詞においても同一の動詞が付随する前置詞句によって補う目的語が異なってくることが分かる。

make up for NP　　NP の埋め合わせをする
＜make it up for NP　NP のために it （＝NPのために空いた空洞）を上まで満たすように(up)する
make up to NP　　NP に取り入る
＜make oneself up to NP　自分自身がNP に近づいた状態 (up) を作る

7．結論

検討した安藤 (2005) の分類による句動詞のタイプ１・２・３については，T's Hypothesis に従って「自明の目的語」（とりわけ，「状況の it」もしくは再帰代名詞）を補充することによってその意味を再現することが可能なことが分かり，その仮説の有効性が確認できた。

また，「自明の目的語」（とりわけ，「状況の it」もしくは再帰代名詞）といった目的語を補えるか否かで，安藤 (2005) が「自動詞」とひとまとめにしていたものは，「純粋な自動詞」と「他動詞」にふたつに分けて考えたほうがよいのではないかということもこれまでの分析で明らかになってきた。以下にT's Hypothesis に基づく新たな句動詞の分類表を示す。（網掛けの部分が変更されたところである。）

安藤(2005) による分類	T's Hypothesis による分類	用　　例
自動詞＋副詞	自動詞＋副詞	come off fall out
	他動詞＋**NP**＋副詞	break **it** dwon drop **oneself** in
自動詞＋前置詞＋NP	自動詞＋前置詞＋NP	look into＋NP stand for＋NP
	他動詞＋**NP**＋前置詞＋NP	take **it** after NP turn **oneself** on NP make **Self-Evident Obj**. for NP
	他動詞＋NP＋前置詞＋**NP**	wait NP for **it** see NP to **it**
自動詞＋副詞＋前置詞＋NP	自動詞＋副詞＋前置詞＋NP	run out of NP look down on NP
	他動詞＋**NP**＋副詞＋前置詞＋NP	make **it** up for NP put **oneself** up with NP
	他動詞＋NP＋副詞＋前置詞＋**NP**	catch NP up with **oneself**

※ **NP** は復元された自明の目的語

8　おわりに

これまでの論証の過程で，消えている目的語として「状況の it」「再帰代名詞」「自明の目的語」を並列的に考えてきたが，「はじめに」でも述べたように「自明の目的語，とりわけ it もしくは oneself」のように捉えるほうがより正確である。「自明の目的語」というより一般的な概念を用いて，句動詞の意味は，＜自明の目的語を補い前置詞や副詞の拡張された様々の意味を考えることによって解明できる＞とまとめることが出来るだろう。

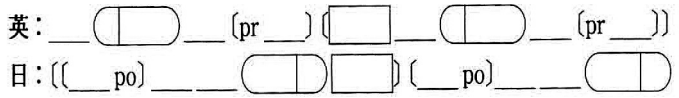
英語を母語とする研究者はこれまで，句動詞をひとまとまりのものとして捉え，それを分解しようという発想はあまり持って来なかった。本論は英語を母語としない研究者が句動詞の意味を分析的に理解しようとした先行研究，とりわけ寺島隆吉氏が提唱しているT's Hypothesis の検証を通して句動詞の意味の秘密を探求しようとしたものであったが，その過程でこの仮説の有効性が確認され，これまで丸暗記の対象となっていた句動詞の意味の構造が明らかにされたのではないかと思う。

本論冒頭で述べた「想定される目的語（it, oneself など）の使用における一定の規則性」については，put up with（我慢する）と catch up with（追いつく）の解析結果が示すように，動詞の

意味の違いがその規則性に大きく関係していると推測される。さらにこのような類似形のペアの比較検討を通して「一定の規則性」の輪郭がよりはっきり浮かび上がってくるのではないかと思われる。

NOTES

1. 英語の基本構造については，寺島 (1986:167) は「「固定した語順」と「よく発達した前置詞の体系」が英語の特徴だととすれば，私たちが生徒に基本的に教えねばならないのも，この２つだということになる」と述べ，さらに英日の構造対照図（同書:175）を示している。[以下の頭は寺島 (2000) において部分改訂されたものである。]



影山 (1996:140)は「結論的には，英語では，自動詞と他動詞の変換はほぼ一方通行で，他動詞（使役構造）を元にしてそこから＜反使役化＞と＜脱使役化＞という２種類の操作があり，その上，自動詞から他動詞を作る使役化も発達していることを述べる。この違いは，英語のスル型と日本語のナル型の基本スキーマを反映しているものと考えることができる」と述べている。「英語のスル型」については，金谷 (2002, 2003) も「万能動詞 Do は他の言語に見当たらない珍しいものである」「英語はこれらの点で実に特殊な言語である。決して人間言語の中で代表的な，標準的な言語ではない」という角田 (1991) の分析を引用して英語が人間の意図的で積極的な行為中心の表現をする「する言語」であると述べている。

2．副詞と前置詞の関係について付言すれば，江川 (1991:290) が，「前置詞の中には (at, from, with のように) 副詞として使われない語もあるが，多くのものは前置詞専用ではなく，副詞としても使われている」と述べているように，目的語の有無によってどちらの品詞になるかが決まる「相互浸透の関係」がある。安藤 (2005:623) は目的語削除にともなって，複合前置詞の第２要素が削除される例も挙げ，副詞と前置詞が見かけは同形ではなくともこの関係があると述べている。

He went into the house.	彼は家の中へ入っていった。
He went in.	彼は中へ入っていった。
He jumped onto the bus.	彼はバスの飛び乗った。
He jumped on.	彼は飛び乗った。

3．drop in に関しては，17世紀にこの表現が最初に出てくることから [Simpson et al. (1989)]，馬車などの乗り物から自分の身を降ろす，つまり上から下への空間的な移動が元になっていると考えられのではないかという指摘をセミナーで受けた。

4．非対角動詞は，Quirk et al. (1985：1169) では「純粋な」自動詞と呼ばれ，その例として appear, die, fall, happen, rise, come, digress, go, lie, wait を挙げているが，実際の文例を見るとこれらの動詞の中にも他動詞用法で用いられているものがある。例えば，go については，”I can't go the noise.”（私はその騒音には耐えられない），“I'll go ten dollars on the first race.”（私は第１レースに10ドル賭ける）のような他動詞用例がある。

鈴木 (2000) は，“He went his way.”, “He went ten miles.” “I'll go my own way”.のような用例においては辞書によって自動詞と他動詞の区別が分かれていると述べ，さらにその混乱について「「場所の移動」や「状態の変化」を表す go や come は文法の整理・統合が始まる近代初期までは自動詞・他動詞の区別は今日ほど厳密ではなかった」と述べている。

5．セミナーにおいて，fall の原義は「高い所から低いところへ落下する」であるから，単に「仲のよい正常な状態から外に出る」ではなくて「仲の良い正常な状態から外に出て（out），下に落ちる（fall)」と解した方がより適切ではないかという指摘を受けた。

6．タイプ２（call＋前置詞）には他にも次のような句動詞があり，いずれも「自明の目的語」として「大声で呼びかけられる誰か」があると考えられるだろう。

Shall we call at his house?　彼の家にちょっと立ち寄ってみませんか。

<call him at his house　彼を大声で呼ぶ，彼の家で

I called on him yesterday.　昨日彼を訪ねた。

<call him on him　彼を大声で呼ぶ，彼のすぐそばで

→　call him on his house　彼を大声で呼ぶ，彼の家のすぐそばで

後者の場合については，同一の目的語 him が現れることになるので，call him on his houseとして解することにする。辞書には，「call at 場所，call on 人」と使い分けると書かれていることが多いが，on の原義が「接触」であることから考えると「家に接触するぐらい近くで呼ぶ」ことから his house が him と変わることは理解できる。

7．look like ～ のlookについては「視線を向ける」ではなく「(～のように) 見える」という意味である。この違いについて政村 (1989)は「①関心をもつ対象に視線を送ると同時に，②対象のようすが目に入ってくる。これら一連の動きを look と言う。もちろん①は《意志的》であり，②は《無意志的》である」と説明し，ふたつの意味を統一的に捉えている。

8．セミナーにおいては，stand には確かに「立つ」「立たせる」の 2 義があるが，「立つ」のほうが無標ではないか，従って，stand for については再帰代名詞を補わずに「～の代わりに立っている」と解せば十分ではないかという指摘があった。

9．前置詞の目的語を動詞の直後に移動し前置詞の後に「状況の it」を補うことについては，下記のような句動詞の生成過程を想定している。

I am waiting　the bus　for it.

私はバスを待っている　　ある理由のために

↓

I am waiting　the bus　for　φ.　・・・it が消える

↓

I am waiting　φ　for the bus.　・・・NP (the bus) がより安定した位置に移動する。

wait の用例を現在の辞書で見ると，小西ほか (2001) では「自動詞 5，他動詞 2」，井上ほか (2003) では「自動詞 6，他動詞 2」の意味が載っており自動詞の用例の方が多く見られる。しかし語源的には「見張る」が原義であり，Simpson et al. (1989) には1200年頃にその意味の他動詞 wait の文献初出があると記載されている。また，wait for については1577年に初出の記録がある。[“… and wayted for no other then present death.”]

また現在の用例として「状況の it」が使われている wait for it という慣用句もある。

The secret is — wait for it — a healthy balanced diet.

秘訣はね—まあ聞きなさい—健康のバランスを考えた食事です。[井上ほか (2003)]

生成過程における「I am waiting the bus for φ.」という形については，次のような「副詞」として登場する to の例があり，上記の生成過程の可能性を示している。[多田 (1982:746)]

The door was shut to. (ドアーはもとどおりにしめられた。)

We brought the ship to. (われわれは船を停めた。)

We brought her to with smelling salts. (かぎ薬で彼の意識を取り戻させた。)

それぞれの to の後には「元通りの位置」「風」「意識ある状態」という自明の目的語が想定され，「状況の it」の省略と考えられる。(なお，第 2 例は「船首を風上に向ける」→「船を停める」と考えられる。)

10.「自明の目的語」として省略されるものの中には，approve of や refer to のように「自明の人」とまとめられるものがいくつかある。タイプ 2 で検討した ask for の次のような例を考えると，文脈によって様々な「自明の人」となりうる。

a.　The miners are asking [　　] for another increase in pay.　[Cortney (1983)]

炭鉱労働者はさらなる賃上げを要求している。

b.　The beggar asked [　　] for some money.　[小西(1985)]

乞食は金を無心した。

c. If you get into difficulties, don't hesitate to ask [　　] for help. [ibid.]
君が困ったらためらわずに援助を申し出てくれ。

d. The workman lost his job, but he asked [　　] for it by coming to work drunk several times. [ibid.] その工員は職を失った。だけど何度か酔っぱらって出勤したから自業自得なのだ。

例文 a では，炭鉱労働者は「炭坑を経営する会社」に新たな賃上げを求めており，例文 b では，物乞いは「道行く人」にお金を乞い，例文 c では，話者である「私」に援助を求めよと言っている。例文 d では，再帰代名詞 him-self が省略されていると考えられる。つまり，「自分自身に仕事を失うことを求める」ということであろう。

11. ケリー (2005) は，put up with について　bear, endure, stand などと比較して，「「一緒にいられる」「ある状態を受け入れられる」という意味で耐えるです。この put up は stay の意味合いなのです。例えば “I hate my job, but I have to put up with it.” は「仕事はきらいだけど我慢してやらなきゃ」という意味になります。この場合 put up with 以外では受け入れてがんばるニュアンスが出ないのです。」と述べている。この例文に本論での結論を適用すると，＜自分の仕事に関して (with my job)，自分自身 (myself) を，それに近づけた状態 (up) に，置く (put)＞となり，「一緒にいる」「ある状態を受け入れる」というニュアンスを上手く説明することができる。ただ，「put up は stay の意味合い」と述べていることに関しては，彼がやはり母語話者として put up を分析的にではなく感覚的にひとまとまりのものとして捉えているからではないかと推察される。

REFERENCES

安藤貞雄 (2005)『現代英文法講義』開拓社

Dixon, R.M.W. (1991) *A New Approach to English Grammar, on Scientific Principles,* Clarendon Press Oxford

江川泰一郎 (1991)『英文法解説』金子書房

東信行・松本理一郎 (1991)『ライトハウス 英語の句動詞』研究社

岩井志ず子 (2006)『授業はトキメキ』あすなろ社 / 三友社出版

イェスペルセン，オット＝ 安藤貞雄 訳 (2006)『文法の原理』（上）（中）（下）岩波書店

Jespersen, Otto. (1924) *The Philosophy of Grammar,* London: George Allen & Unwin.

影山太郎 (1996)『動詞意味論――言語と認知の接点』くろしお出版

金谷武洋 (2002)『日本語に主語はいらない 百年の誤謬を正す』講談社

――― (2003)『日本語文法の謎を解く－「ある」日本語と「する」英語』筑摩書房

ケリー・伊藤 (2006)『英単語「比較」練習帳』宝島社

小西友七 (1976)『英語の前置詞』大修館書店

レイコフ，ジョージ& マーク・ジョンソン著＝渡部昇一・楠瀬 淳三・下谷 和幸 訳 (1986)『レトリックと人生』大修館

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By.* University of Chicago Press

レイコフ，ジョージ著＝池上嘉彦・河上誓作 他訳 (1993)『認知意味論』紀伊國屋書店

Lakoff, George (1987) *Woman, Fire and Dangerous Things.* University of Chicago Press

野澤裕子 (2003)『授業はドラマだ』あすなろ社 / 三友社出版

大西泰斗，ポール・マクベイ (1999)『ネイティブスピーカーの単語力 1 基本動詞』研究社

――― (2005)『みるみる身に付く！ イメージ英語革命』講談社

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language.* Harlow: Longman.

酒井典久 (2005)『英語のしくみが見える英文法』文芸社

鈴木寛治 (2000)『こんな英語ありですか？ 謎解き・英語の法則』 平凡社

田中茂範　(1987)『基本動詞の意味論』三友社出版

――― (1989)『ひと目でわかる英単語ネットワーク』アルク

———— (1990)『英語動詞の多義の構造』三友社出版
角田大作 (1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版
寺島隆吉 (1986)『英語にとって学力とは何か』三友社出版
———— (1989)『英語にとって授業とは何か』三友社出版 （絶版）
———— (1990)『読みの指導と英文法』三友社
———— (2000)『英語にとって文法とは何か』あすなろ社/ 三友社出版
寺島美紀子 (1987)『英語学力への挑戦』三友社出版
山田昇司 (1999 a)「Walk down the streetをめぐって」"Applied Semiotics" Vol.4, No.7, P.23
———— (1999 b)「Walk down the street その後」"Applied Semiotics" Vol.4, No.8, P.23
———— (1999 c)「群動詞をもう一度考える」"Applied Semiotics" Vol.4, No.9, P.24
———— (2000 a)「熟語について——その 4 」"Applied Semiotics" Vol.4, No.10, P.21
———— (2000 b)「自動詞の他動詞的分析」"Applied Semiotics" Vol.4, No.10, PP.22-23
———— (2005)『授業は発見だ』あすなろ社 / 三友社出版
山田昇司・寺島隆吉 (2006)「動詞の意味を学ぶ授業書—— getとturnの話」『岐阜大学教育学部研究報告・教育実践研究』VOL.8, 2006

DICTIONARIES

浅野博・緒方孝文・牧野勤 (2003)『アルファフェイバリット英和辞典』東京書籍
Courtney, Rosemary. (1983) *Longman Dictionary of Phrasal Verbs,* Longman Group Limited
Cowie, A.P. and R.Mackin. (1975) *Oxford Dictionary Of Current Idiomatic English*, Volume 1: Verbs with Preposition & Particle, Oxford University Press
井上永幸，赤野一郎 (2003)『ウイズダム英和辞典』三省堂
勝俣銓吉郎 (1958)『新英和活用大辞典』研究社
木原研三 (2001)『グランドセンチュリ英和辞典』三省堂
小西友七 (1985)『英語基本動詞辞典』研究社
小西友七・南出康世 (2001)『ジーニアス英和辞典』第 3 版　大修館書店
正村秀實 (1989)『図解英語基本語辞典』桐原書店
Simpson, J.A. & E.S.C. Weiner (1989) *The Oxford English Dictionary*, the Second Edition, Clarendon Press Oxford
竹林滋・小島義郎・東信行・赤須薫 (2002)『ライトハウス英和辞典』研究社
田中茂範・武田修一・川出才紀 (2003)『Eゲイト英和辞典』ベネッセコーポレイション
多田幸蔵 (1982)『英語動詞句活用辞典』大修館書店

WEBSITES

スペースアルク英辞郎on the Web　http://www.alc.co.jp/